

研究のまとめと今後の課題

1 まとめ

○ 問題解決の学校システムへの転換

問題解決の学校風土とは、学校全体に問題解決能力が存在することを意味する。それにはまず、支援に役立つ情報を相互コミュニケーションしながら、交換し収集しなければならない。情報連携が必要だということである。これは、学校における情報力と言うことができる。次に集められた情報をアセスメントし、支援につなげていかなければならない。この力を理解力と言うことができる。そして、理解したことを基に計画（方針、支援策）を立てて、効果的に支援していくことが必要である。これを対応力と言うことができる。問題解決能力は、情報力・理解力・対応力の3つに構造化することができる。（図17）

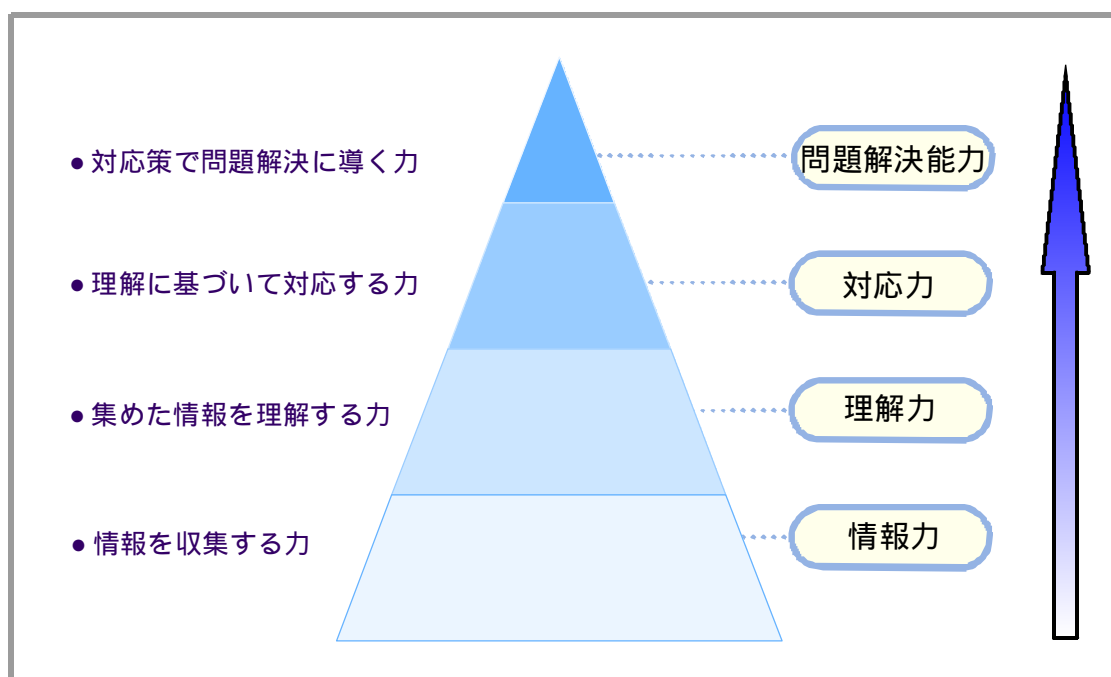


図17 問題解決能力の構造

こう考えると、情報が流れることが、問題解決の基盤であることは明らかである。情報が流れ、相互コミュニケーションが成立する学校は、問題解決の学校風土の基礎づくりができていると言うこともできる。

教師一人一人も、問題解決能力を身につけることが必要になってくる。早期発見・早期対応プログラムは、子どもとともに問題解決を図る過程で、教師にこれらの力をつける一助となる。一人でも多くの教師が問題解決能力を身につければ、問題解決の場を共有した子どもも、問題解決能力が高まる。ひいては問題解決の学校風土の醸成につながり、学校は、問題解決システムへと転換していく。

このようにして、早期発見・早期対応プログラムは、不登校問題の解決を目指すとともに、情報が流れることを基盤にして、学校を問題解決のシステムに転換することを促すと考える。

（図18）

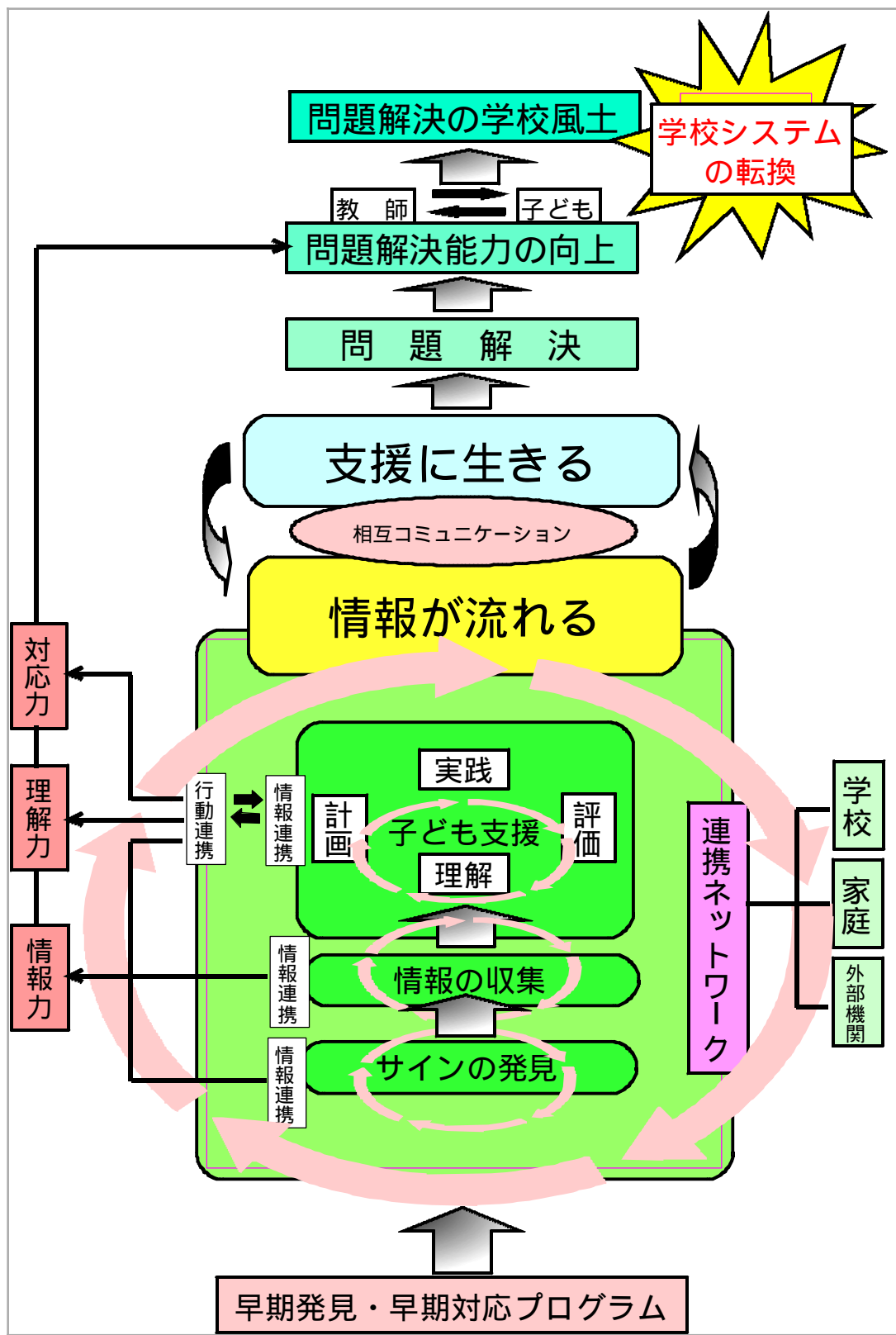


図18 早期発見・早期対応プログラムによる情報が流れる問題解決の学校システムへの転換

- 問題解決能力の定着と応用

適切な早期発見・早期対応ができ、不登校を予防できている教師は、問題解決能力が身についていると考えられる。このことによって、不登校に陥っている生徒への支援や他の問題行動への対応等にも、それを応用することができると考えられる。

- 前兆期のアセスメントシステムの確立

不登校の前兆期・初期に不適切な対応をすることで、長期化・深刻化を招くことも多いので、この時期のアセスメントシステムを早期発見・早期対応プログラムに導入する。不登校傾向を示す（不登校のサインを出す）子どもへの対応を、早期に判断できる学校のシステムをつくっておくことが重要だと考えられる。

- 不登校のサインのカテゴリー化と対応

早期発見・早期対応プログラムでは、不登校兆候のサインを4つにカテゴリー化して対応策を考えているので、固定的な対応をすることの危険性を指摘されるところだが、不登校傾向にある子どもの支援者は、どう動いていいかわからない場合が多いと考えられる。そのため、目安になる対応策の指標をつくって、具体的にアクションを起こしやすいプログラムを目指した。

- 円環的支援とチーム支援のモデル化

適応指導教室でのフィールドワークの学びから、【情報収集による子どもの実態把握→子ども理解・アセスメント→支援目標・方針・支援策の計画（P）→支援の実践（D）→評価・検討（S）】のP（計画）→D（実践）→S（評価・検討）のサイクルに、実践に向けての支援者の学びやトレーニング（T）を取り入れた、T→P→D→S（あるいは、P→T→D→S）のサイクルを円環的に繰り返す支援が、不登校への柔軟できめ細かい対応に結びつき、効果を上げていた。また、適応指導教室が一つのチーム（組織）になって、個々のスタッフの特徴を子どもの実態に生かしながら、支援することが子どもの変容をもたらしていた。早期発見・早期対応プログラムにも組み込んだこの2点をモデルにして、不登校傾向の子どもや不登校状態にある子どもの実態に応じながら、支援していくことが重要かつ有効だと考える。

2 課題

- 早期発見・早期対応プログラムのアクションリサーチ

今後、学校現場で本プログラムを活用し、アクションリサーチ（理論を現実のフィールドで相互循環的に実践研究すること）的手法での研究を継続して、実態に合わせて、計画を立てて、プログラムを実践して、評価し、修正・改善のサイクルを繰り返しながら、より実践的で、利用価値の高い不登校対策に有効なプログラムにしていくことを課題としたい。

- 環境的な条件・予防的取組としての学校システムへのアプローチ

不登校の予防的取組として、環境的な条件、特に、学校というシステムへのアプローチが一層必要になると思われる。魅力のある学校づくり、引力のあるシステムづくり等が、子どもを学校へと結びつけておくきずなを強化し、学校内の潜在的ストレスを軽減させて、不登校や不登校傾向の発現を抑えようとする。それには、子どもが、学校、学級の居心地のよさ、よい雰囲気、部活動のよさなどを味わえるような取組、自己実現を図れたり自分の欲求やニーズを満たしてくれたりする子ども主体のカリキュラムを構成することなど、子どもが学校に魅力を見出すような教育活動が必要になる。

- 内面的条件へのアプローチ

子どもの内面的な条件へのアプローチも必要だと考えられる。特に、適応指導教室でのフィールドワークの学びから子どもの自尊感情・自信を高めるための取組が不登校児の支援に有効であることがわかった。この自尊感情・自信も含めて、対人関係能力、コーピング・スキル（ストレスに対処する能力）等の内面的な条件を向上させることが、不登校の予防、自立・学校復

帰に向けた不登校への対応には重要である。子どもの内面的な条件に、より効果的にアプローチする方法の研究が必要だと考えられる。

○ 校外の連携ネットワークの強化

学校現場での実践や適応指導教室でのフィールドワークでの学びから、適応指導教室と学校との連携に課題があることがわかってきた。また、学校では、よいとわかっているにもかかわらず校内体制でのチーム支援が実践に至らないなどの課題が存在していた。これらの課題を克服することが、不登校問題解決の支援のために有効に働くと考えられるので、チームでのかかわりを十分生かした支え合う学校体制システムづくりの確立、外部機関を含めた連携ネットワークによる協働（行動連携）構築の研究も重要である。

○ 自尊感情を高める人・時・場を考えた段階的な支援

二つの適応指導教室に共有された学びのうち、段階的な支援（スモールステップでとらえる支援）、子どもの自尊感情・自信を高める支援については、この2点を関連させながら、子どもの自尊感情・自信を高める、人・時・場を考えた段階的な支援として展開していくことが可能である。そのためには、支援の多様性に応える多様なプログラムづくりの研究が大切である。

主な引用文献・参考文献

- ・梅垣 弘 編著 『医師のための登校拒否 119番』 ヒューマンティワイ(1990)
- ・小澤 美代子 著 『上手な登校刺激の与え方』 ほんの森出版(2003)
- ・相馬 誠一・花井 正樹・倉淵 泰佑 編著 『適応指導教室 - よみがえる「登校拒否」の子どもたち』 学事出版(1998)
- ・小林 正幸 著 『不登校児の理解と援助 問題解決と予防のコツ』 金剛出版(2003)
- ・牧 昌見・甲斐 志郎 編著 『登校拒否児の発見と援助指導』 教育相談双書(1987)
- ・坂本 昇一 著 『登校拒否のサインと心の居場所』 小学館(1993)
- ・國分 康孝 監修 『育てるカウンセリングによる教室課題対応全書 不登校』 図書文化(2003)
- ・河合 伊六 桜井久仁子 著 『不登校 再登校の支援』 ナカニシヤ出版(2000)
- ・森田 洋司 編著 『不登校 - その後』 教育開発研究社(2003)
- ・佐藤 郁哉 著 『フィールドワークの技法』 新曜社(2002)
- ・石隈 利紀 著 『学校心理学』 誠信書房(1999)
- ・亀口 憲治 著 『家族療法的カウンセリング』 駿河台出版社(2003)
- ・内山喜久雄・坂野 雄二 編著 『問題行動の見方・考え方 子どもを取り巻く問題と教育(4)』 開隆堂出版(2003)
- ・菅野 純 著 『問題行動へのアプローチ 子どもを取り巻く問題と教育(18)』 開隆堂出版(2003)
- ・坂野 雄二 著 『認知行動療法』 日本評論社(1995)
- ・群馬県総合教育センター 『SSNスクーリングサポートネットワーク 不登校問題 課題解決支援資料』(2004)
- ・国立教育政策研究所生徒指導研究センター 『生徒指導資料第2集 不登校への対応と学校の取組について - 小学校・中学校編 - 』 ぎょうせい(2004)
- ・国立教育政策研究所生徒指導研究センター 『中1不登校生徒調査(中間報告) - 不登校の未然防止に取り組むために - 』(2003)
- ・学校不適応対策調査研究協力者会議報告『登校拒否(不登校)問題について - 児童生徒の「心の居場所」づくりを目指して』(1992)

- ・不登校問題に関する調査研究協力者会議「今後の不登校への対応の在り方について（まとめ）」(2003)
- ・鹿児島県総合教育センター 研究紀要第100号『不登校への予防的対応に関する研究』(2003)
- ・栃木県総合教育センター 『「不登校児童生徒の援助・指導の在り方」に関する調査研究（中間まとめ）』(2002)